突撃！リスクマネージャー！！

医療の安全に取り組む全国のリスクマネージャー様にインタビュー！

No7. 日本大学医学部付属練馬光が丘病院
専従医療安全管理者 看護師長 駒木根 由美子様

■病院概要
日本大学医学部の付属病院として平成 3 年に開院。(344 床)
各分野の専門医を擁しており、地域の基幹病院として高度の医療を提供し、 地域医療に貢献している。

各地での講演会なども数多くされている、駒木根様にお話をうかがってきました。
患者年齢・時間帯・事故種類別の事故詳細グラフを事前にご準備頂いており、
こちらから質問する前に、資料を用いながら様々な事例を元に、 転倒・転落対策の
現状や課題について、熱心にお話頂きました。

1. 転倒・転落対策において重要なことは何ですか？

患者様のアセスメントをしっかりすることはもちろんですが、そのアセスメントで得た情報を現場で共有し、且つ患者様とのコミュニケーションを図りながら、その方に合った対策をすることが重要だと考えています。
情報共有の１つとして、患者様の安静度が一目で分かるように、ベッド脇のプレートには患者様の状態が記載されています。しかし、患者様の状況によっては同じ安静度でも対応が異なるケースがあるため、その情報だけで対応するのではなく、患者様との会話からも判断することが必要になってきます。
患者様と直接話をすることで、この方にはどういう介助が必要なのかと考えるようになり、看護師のアセスメント能力が高まりますし、なにより患者様とのコミュニケーションを図ることができます。
認知症の患者様も、冷たい言葉をかければ傷つきますし、暖かい言葉をかけると笑顔になるものです。
「認知症だから何を言ってもわからない」ではなく、積極的に会話しその方の状況に沿った看護をする事を心がけたいです。

2. どのような転倒・転落対策をされていますか？

先ほど申し上げましたように、まずは、患者様のアセスメントをしっかりし、患者様の情報を把握するようにしています。
また、当院の転倒・転落の要因で大きいのが「排泄」に関わることですので、それぞれの患者様の状況に合わせた排泄誘導を行うことを心がけています。眠剤服用の前、食事の前などに排泄誘導をすることにより転倒・転落が減ったという報告もあります。
そして、見守り看護の一環として離床センサーを使用しています。ただし、離床センサーを設置したからといって、「何かあったらセンサーが知らせてくれるから大丈夫」ではなく、その方が何をしたくてその行動に至ったのかを振り返る手段として、利用するようにしています。
転倒・転落対策についてのポイントや離床センサーの使い方などについては、新人教育時の研修に盛り込み、また日頃より、看護師から成る転倒・転落対策チームで転倒・転落を減らすための検討会を開いています。
また、医療安全管理者として現場での指導を第一にしていますので、万が一事故が起こった際には、「どういった患者様」で、「どういった行動を取りやすく」、「どういった経緯で事故に至ったか」を現場で確認し、さらに、事例紹介をしたり、データを見せたりしながら指導をして、状況を十分把握・認識してもらうようにしています。

3. インシデントレポートを有効活用されているようですが？

当院では約 2 年前にインシデントレポートを電子化したことにより、報告件数が増えました。
増加の要因としては、紙に書くよりもパソコンに入力する方が作成しやすいこと、さらに、レポートには必ずコメントを記載して返却しているので、報告したことに対してフィードバックしてもらえる、「提出して終わり」とならないことが挙げられます。そのため、現場では、レポートのやりとりが楽しいという声も聞きます。また、報告内容が不鮮明な場合は現場に赴き、「なぜそうなったのか」を確認し、その後の経過を報告するよう指示をしています。さらに、レポートは室長も確認しますが、そのことが報告側に良い意味での緊張感をもたらし、事実確認の取れた良いレポート作成に繋がっているようです。
この電子レポートを元に、年度・患者年齢・時間帯・事故種類別の事故詳細グラフを作成して、現状・アセスメントを把握し、どういった対策が必要かを分析しています。例えば、転倒・転落はトイレ行動で起こることが多いのですが、排泄誘導を指導することで発生数が減ってきています。

4. 小児病棟でも、効果的な転落対策をされたとうかがいましたが。

以前は小児病棟でも月に 2、3 件転落事故の報告がありましたが、対策を講じてからはゼロになりました。 小児病棟での転落の 1 番の解決策は、看護に関わる全員が「何に注意したらいいのかを知っている」ことです。 具体的には、ベッド柵には「必ずベッド柵を上げてください」というシールを貼り、入院時には必ず転落に関するオリエンテーションを行い、 お子様が転落しやすい状況というのをイラストで説明するようにしています。また、父親が付き添う際は、母親から父親への申し送りを徹底して頂くことで、 入院時のオリエンテーションを受けていない父親にも協力して頂いて、転落を回避できるようにしています。

5. 転倒・転落対策を行う上での課題や心がけていることは何ですか？

高齢化に伴い、認知症の患者様は今後も増えていきます。それに伴い、看護師が介入しなければいけない場面も増えてきます。そんな中、患者様に視点をあてた優しい看護であることを意識しなければならないと考えています。
例えば離床センサーを使用している場合、体を拘束していなくても、離床センサーの使い方次第で、患者さんにとって拘束になっている場合があります。センサーが反応し看護師が患者様の元へ駆けつけた際の対応によっては、看護師に監視されている、または、怒られるといった印象をもってしまい、結果患者様を気持ちの上で拘束しているということになります。このような印象を患者様に与えると、センサーを飛び越えてしまったり、避けてしまったりといった現象が起きてしまいます。「センサーがあるから大丈夫、対策はできている」ではありません。患者様の状況を確認し患者様の立場に立った、思いのあるケアの上で、センサーを使用することが重要なのです。
心の通い合ったケアが何より大切です。自分がされたくないことは、患者様もされたくない。患者様によりそった看護をする。それが基本であり、課題だと思います。